

THE WEEKLY TOYO KEIZAI

明治28年11月14日第3種郵便物認可 第5032号
毎週土曜日発行 1991年11月2日発行

週刊 東洋経済

特大号
11/2

聞くと見るとで大違い

全面特集 ソ連への大誤解

世界の財政はソ連を救えるか

対談 中西輝政 vs 江畑謙介

米ソ「軍縮競争」の落とし穴

ソ連に「ヒトラー」登場の危険 ヴィハンスキー

北方領土返還はソ連のためである サルキンソフ

宮沢 喜一

新総裁への注文

大来佐武郎 山口敏明



内での選択という可能性はなくなつた。マルクス主義的な観点からするならば、あれはやはり本物の革命だったと言える。イデオロギーが変わっただけではなく、いわゆる下部構造の関係が変わつたと言える。資本主義的な関係の可能性がこうして生まれたわけだ。

最も重要な八月革命の成果、それは社会が私的所有、あるいは資本主義に向かって進み出したということだ。

しかし、ソビエトという国は革命

によって被害を被つてきた国だ。革命というのは国民にとって毎回毎回、悲劇である。そして、今回の革命もまた国民にとっては大きな苦悩となるだろう。

これから本格的経済崩壊へ

革命の第一段階は古いものの拒否だ。共産主義イデオロギーは反人道的な正しくないものとして、否定された。権力者の銅像も壊された。しかし実はそれ自体は比較的容易にできることだ。しかしながら、その拒

絶の後に、創造的なファクターが働かなくてはならない。そして、その時点で、銅像を取り外すよりも、はるかに困難な事態が待ち受けているのだ。

第一に古いシステム、新しい経済をつくり出すための基本的な前提、経済的な前提というものがまだ形成されていない。

つまり、事業家、ビジネスマンたちの階級というのは、まだまだきわめて脆弱で小さい。だから、形の上ではきわめて資本主義に近くなつても、本質はアンシャン・レジームのものだ。労働者階級、つまりこれは人口の大多数を占める人々だが、大多数はやはり資本主義化という考え方、思想を強力には支持はしていない。いずれ、近々にも、本格的な経済の崩壊という現象が起こるのではないかと思う。

本社 経済的な崩壊とは一体どういうものですか。

ヴィハンスキー 第一に、新しい生産様式に基づく新しい企業のリーダーたちは、いずれも古いアンシャン・レジームのリーダーたちだ。党官僚であったり、行政官僚であったりする。こういったリーダーたちは、

市場法則にのつとつて仕事はできない。彼らは昔の方式で仕事をする。この人たちは現実的な市場関係の中で仕事ができないだろう。

第二の側面は、非常に人気が出てきている、従業員による所有という問題だ。つまり87年に自主管理というコンセプトが出され、ある企業、あるいは工場が私営化され、その所有権が全従業員に配分されてきた。この結果どうなるか。荒っぽく言うと、従業員たちは自らの企業を食いつぶしてしまうのだ。

この二つのプロセスが、市場経済へ向かう中で、ソビエト経済を完全に崩壊に導く。そして、その後やつと肯定的な前向きな要素といったものが、形成されてくるのではないか。

得しようとする人々

今、行政権を持つている人々、彼らも豊かな資本家になりたいと思っている。だから、今ある所有権を自分のものにならんと望んでいる。

現在、事業家たちと行政家たちの間の紛争が激化しているが、まさにそこに原因があるわけだ。新しい事業家たち、本物のビジネスマンは、民営化、つまり脱国有化というもの



オレグ・ヴィハンスキー博士

モスクワ大学ビジネススクール学部長

ソ連に「ヒットラー」登場の危険

ソ連はこれから本格的な経済混乱に突入する。危機打開は困難をきわめるだろう。そして人々が民主勢力が何もできないのだと分かった時、ソ連の「ヒットラー」が登場する危険がある。

本社 先生は今回のソ連の8月クーデターを、どのように解釈していますか。

ヴィハンスキー まず第一に私が指摘したいのは、8月のクーデターに対する抵抗には、大衆的な多数数の労働者階級による支援、支持という現象はなかった点だ。積極的であったのは、日頃、各政治集会に参加していた面々で、そうした人々がホワイトハウスの防護に当たったし、同じような人々がやはり積極的にレニングラードでも集会とか、デモに

参加した。他の都市でも、同じような現象だった。

どのようなグループの人々がクーデター打倒の集会に参加したかという、学生のほか、暴走族、あるいはパンクといった一種の暴力団的な要素を持つ若者たち。それからアフガンの帰還兵、彼らもかなり大きな役割を果たした。それから、政治集会によく出てくる女性たちに、知識人だ。

つまり、主に民主ロシアが主催する集会にいつも参加していた人々が

核となり、それに若者が加わったという感じだ。また、いわゆる若い事業家たちも運動を援助したし、外国人も手助けをしてくれた。それが全体像だ。

本社 8月革命によって改革へのイデオロギーの障壁というのは完全に崩壊しましたね。

ヴィハンスキー 革命という規定をなさったが、私は賛成だ。

あれでペレストロイカが終了し、完了したとみる。ある意味ではペレストロイカはああいう形でしか終わることができなかったということだ。なぜかという、ペレストロイカというのはゴルバチョフが幾度も繰り返し言ったように、これは社会主義という体制内での選択の問題であつた。

しかし、社会主義内での選択では、

体制そのものを抜本的に変革することとは不可能だったのだ。

あのクーデターをやるうとした人たちは国の指導者で、社会主義的な選択という枠を守ろうとした。

しかし、結果としてそうはいかなかった。六年間のペレストロイカによって、新しい社会への転換というものも準備されていたからだ。つまり、人々の頭の中には新しい意識が生まれ、また新しいマスコミも生まれてきていた。民間のビジネス、事業といったものも生まれてきた。つまり、自由な国になつてきていた。そして、何よりも重要なことは、国に新しいリーダー、指導者が生まれてきていた。この人たちはすでに社会主義的な選択という立場をとらなくなつていたのである。

あのクーデターで、社会主義の枠